

山口・初瀬遺跡

- 1 所在地 山口市大字宮野下地内
- 2 調査期間 一九九三年(平5)四月～八月
- 3 発掘機関 山口市教育委員会
- 4 調査担当者 増野淳一
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 一五世紀～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(山口)

初瀬遺跡は、山口盆地北東部山麓の先端の山間部に造られた堤の縁に位置し、水位が高い時期には水中に没することもあった。中世に山口を支配していた大内氏の館跡からは北東約1kmの距離にあり、さらに遺跡から北東約四〇〇mの山麓には、雪舟邸で著名な常栄寺がある。堤の南前方の丘に初瀬観音堂がある。大内氏の時代に創建されたという初瀬寺は当地よりさらに

北奥の山岳にあったといわれるが、確認はされていない。現観音堂は後に建てられたものであるが、初瀬寺に祀られていたという十一面観音像(重要文化財)が戦前まで安置されていた。

本遺跡の調査は、民間の宅地造成に伴う緊急調査として行なったものである。約九〇〇㎡を発掘調査した結果、谷間の傾斜地に、四本柱の門、塀とみられる柱列が検出され、その内側に溝・掘立柱建物・円形状遺構・木囲い遺構が確認された。さらに石囲い遺構が造られた旧河川を挟んだ緩斜面で、掘立柱建物群や土坑群が検出された。

遺物は旧河川の湿地部の落ち込みを中心として多く出土した。土器は、量的には土師器の皿が最も多く、瓦質の鍋がこれに次ぐ。その他、須恵質陶器の四耳壺、龍泉窯系青磁、白磁、青花磁器、李朝陶磁器、瀬戸美濃産の天目茶碗も出土している。土師器皿には、大内氏館跡以外では出土例の稀な厚手のものや、「理超」や「涼(あるいは浄カ)本」と書かれた墨書土器もある。遺跡周辺は後世に堤として利用されたため、木製品の遺存状況も良好で、下駄・櫛・桶・漆器・羽子板状木製品などが出土している。漆器には「明」や「延」という朱漆文字がみられるものもある。

笹塔婆は塀に沿った幅一二〇cm前後の溝の底近くからまとまって出土した。この溝は排水用の溝と思われる、最終的には人為的に埋められている。(3)は旧河川の湿地部に造られた石囲い遺構の底から出

